支那水利地理史研究

池田靜夫著

支那の歴史、支那の社會、果支那の地理を理解する一つの鍵が東亜風土の特性より來る水利にある事は今や内外學者の等く認むる所である。水利に關する支那の文獻は史記河渠書以下汗牛充棟の有様であり、最近も支那水利史が支那人の手によつて編まれてゐる。しかし之等の支那水利史は稍もすれば地理を離れて說かれ外國人にとつてその眞相の把握は決して容易でない。

本書は地域を江南杭州及その附近にとつて、著者數年の見聞を緯とし、關係文獻を經として云はゞ人文地理的方法によつて組織されたもので既往の支那水利研究の缺を補ふに足る力著である。

第一章にクリークの意義をのべ、これはもとより英語であるがクリークが支那に現れたものは極めて古くからであると云ふ。クリークは灌漑排水の施設であつて、之に圍まれた農田を特に圩田と云はれる。又クリークは交通に役立ち江南の都市は皆之に據つて發達した。

第二章はクリークの發達を蘇州デルタに就いて述べ、大湖の排水河川である松江――今日の吳淞江と考へられてゐる――の淤塞と黃浦江の出現をめぐり、宋代に多くのクリークが堀られ、デルタの干拓が行はれた事、クリーク偏在の樣を二三の地方志に基いて例證し圩田に於ける圩戸の團決が支那農村共同體の核である所以を强調し、又宋以後の地方都市たる市や鎭が皆クリーク都市なる事をのべてゐられる

第三章から第八章までは杭州に關する研究で、唐宋代の杭州、杭州の運河、浙西、浙東の運河、海港としての杭州、外港としての澉浦、杭州の碼頭及碼頭市等に就いて詳細なる記述をなされる。第九章は新支那の建設と運河問題として大谷光瑞師の大湖崖長興に新支那の首都を建設すべしとの論及それに附隨する運河計畫を批評して、それが宋代唱へられた所に酷似するものある事をのべ支那に於ける水運の重要性を論じて新支那經濟秩序の建設には在來の仕方である水運を先づ整備する必要あると結ばれてゐる。

本書は著者序文によれば東北帝大に於ける杭州に關する卒業論文を基礎とせられたもので杭州の研究が全體の六分ノ五を占めてゐる。從つて支那水利地理史と云ふ書名と内容とは多少一致しない憾がある。勿論人口五百萬にも達する大都會を建設した杭州發展の基礎として水利を詳述されてゐるのではあるが。それで本書は、たゞに水利を研究するもののみならず、むしろ、杭州、ひいては宋代の政治經濟に關心あるものゝ必讀の書である。

岡崎博士序文に支那の人文地理を考へんと欲すれば文獻上の研究を盡さねばならぬ。著者の研究法はこの線に沿ふものとして、所謂自然學者が往々自己の假說を證明せんが爲に文獻を利用し、却つて實驗的研究をも誤る事を戒められてゐる。洵に傾聽すべき忠言で人文地理學徒の猛省を要する所である。しかしこの事は人文地理の研究が現實の景觀に換ゆるに史料を以てし得る事を意味せられたものではもとよりなかるべく、歴史地理の研究に於ても

自然環境が先づ前提として一應考へられねばならない所であり、本書の卓越も一つはこの點より來つてゐる。又著者は本書を自ら顯微鏡的研究と稱されてゐるが、あらゆる文獻を渉讀する歴史家の立場としては正に而あるべきであらう。しかし人文地理としては望遠鏡的研究が更に必要ではなからうか、この點往年社會學が歴史より受けた批判にも一脈通ずる所あり、地理學者が歴史を解するに越した事はないけれども、それが歴史家と同じ程度である事は必しも要求せらるべきではなからう。著者の立脚される所は歴史學に於ける歴史地理の立場であり、地理學に於ける歴史地理の立場――これが本來の人文地理の立場であるが――とは嚴密には相異なるものである。（生活社版、三三三頁、地圖、寫眞挿入定價四圓）〔米倉二郎〕

Eckert-Greifendorff, Max: Kartographie; Ihre Aufgaben und Bedeutung für die Kultur der Gegenwart. Berlin, Walter de Gruyter u. Ko, 1939. 437 s.

著者エッケルトは獨逸の地理學者であり、殊に地圖學者として世界的に著名な人物である。若くしてライプツィッヒに遊學し、近代地理學に於ける泰斗ラッツェル教授の指導を受けた。その後一九〇七年以來はアーヘンにあつて學生の指導に任じ、爾來三十年、地理學の各分野に顯著な業績を擧げ、老いて益々碩學、その精力と熟意とを擧げて學界にまた教育界に活躍しつゝあつたが、一九三八年十二月、七十一歳の高齢を以て學界痛惜の中に長逝したのである。

彼の活動的な生涯を通じて著しい事は、民族愛・祖國愛の熱誠に裏付けられつゝ絶えず清新に燃え續けたその研究心と、極めて該博な知識の迸りが、多方面の著述となつて現れて居ることである。彼の師事した偉大なる地理學者ラッツェル教授の影響を多分に受けて、人文地理學殊に經濟地理學に多大の關心を有し著書も多かつた。また植民地問題に注目し、殊にドイツの植民地に就ては深甚の關心を抱き、貴重な研究論文を發表して居る。斯かる基礎的な研究に身を投ずる反面に於て、地理教育にも注意を拂ひ、各種の獨特な教科書並に地圖を公刊して學生の教導に深く顧慮する處があつた。

併し乍らエッケルトの最大の業績としては、やはり地圖學に關するものを擧げなければなるまい。抑々彼が地圖に興味を抱き始めた動機といふのは、ラッツェル教授の助手を勤めて居た當時、師の命を承けて各種の教授用地圖を作製するに當つて、實際上種々の困難に直面しつゝ色々工夫を凝らしたことに胚胎するのであり、在來坊間の地圖に不滿を感ずると共に、地圖學の確立を念願するに至つたものである。

既に一九〇七年には「科學としての地圖學」なる論文を發表してこの方面に對する彼の意圖と抱負とを吐露して居る。爾來彼の生涯を通して、教育並に研究領域に於ける一科學として地圖學（彼の所謂 Kartenwissenschaft）を確立し、地圖の文化的社會的意